

私の軍隊手帳から従軍の思い出

昭和十四年十一月一日

現後兵として夜倉歩兵隊五丁七聯隊歩守隊に入営同日北支派遣
方三十三師団歩兵隊二百十三聯隊歩守隊中隊に編入

昭和十四年十一月十四日

北支那方面軍派遣の爲 神戸港出発

同年十一月十九日

北支那塘沽港に上陸。凍りつく波頭を内地護送の道に遣骨
に胸をくわつけられる思ひを最敬禮をした。自分は身明日はりと

同年十二月三日

塘沽出発。有寧寺を貨物列車 城武果城を貨物自動車輸送

同年十二月二十二日

山東省城武果城武着。その夜更け敵砲撃を受け。初歩兵二同教育
係上等兵に引率を承け方まを城壁にばりつていた

大隊砲小隊に編入す。中尉教官 以同軍曹助教 金上等兵

助手 中村上等兵助手の指導で教育訓練開始

同年五月十七日

城武に於て定期検査終了後南魯果分屯を爲す。分屯隊編成
は隊長洋崎准尉以下二十名 大隊砲三門重機一基小銃十五丁の装備

同年六月一日

命陸軍一等兵 星ニラヒを一人前の兵隊とする。

同年六月五日

城武果辰橋附近の戦場に大隊砲小隊指揮班連絡手として参加する
管理果城壁から突如敵の攻襲を受けこの敵戦で古歩兵二名が
戦死する。生を初めたり其戦に参加して 初歩兵二同歩兵の
すまき(敵の)機銃掃射に受たると顔色なし。

管理果改略后放棄する敵を遠東多大の戦果を得る。

昭和十五年十月一日

大隊砲觀測班西委員として南魚沼集城内に於て横田伍長より守備相川一等兵と共に砲隊砲觀測教育を受ける。

昭和十五年十月七日

南魚沼集城外に於て軍馬運動実施中誤る落馬し右手頸坐傷金部方三平少尉因り野戰病院に入院、金部は方三大隊本部が有り城武より約十里程高きいた。一月半入院中治癒退院を一日千秋の息を待つこと。

昭和十五年四月二十九日付

支那事変才次論功行賞に依り敘勲八等授瑞宝章 受ける

昭和十五年十二月一日

命陸軍上等兵 中隊初年兵七十名中^{から七名先被さ}三位の序列で進級する

同年十二月十八日

治癒退院城武中隊本部に飯隊する

昭和十六年一月十一日

南魚沼に分屯復版十五年徵集初年兵教育係助手として大隊砲教育訓練を行なう。教官陸軍少尉五十嵐清志

助教陸軍伍長横田四郎助手陸軍上等兵青木基治武井勇

昭和十六年三月七日

南魚沼より中隊本部が有城武に移り初年兵教育を続行するその間大隊本部の金部に於て第一期総合検閲を終了する

同年四月六日

北支那中原会戦に大隊砲小隊指揮班連絡手として出動する

約七ヶ師団と動員水軍に大黄河を渡り南封附近より山岳戦を展開

同年六月二十五日

約三月の間ほど連日連夜の追撃戦の爲足の裏が鉄板のように固くなつた。我が軍の大勝利で会戦を終り

昭和十六年六月二十六日

鉄道輸送を済寧に着済寧より約三十五里東方奥地に入った懐しい
城武果城に帰隊する

同年九月二日

方三大隊本部に配属のあり山東省單果軍に到着大隊砲方分隊副官
同年十月四日

方三機園銃中隊復帰の爲城武に到着城武果城門衛兵舎前勤務
同年十月三十日

第三次魯南剿共作戦に大隊砲分隊射手と参加する。

方三作戦では山東省北東部山岳の敵ゲリラ隊掃揚に對し夜間強
行軍を以て拂曉迄攻奥をくり返す大戦果を擧げる

十月八日曉の山頂に日の丸を掲げ得兵萬歳三唱する。朝食后、

部隊は大休止各隊宿營準備中。國谷少佐大隊長より命令傳達
に依り今朝未國と戦布告の電電表信も受けたに自表表される。

海外情報の手備知識が全く乏しかった將兵一同云々知れぬ無量感に決
意新らに顔を見合せを許らるる。

昭和十六年十一月一日

任陸軍伍長。十月三十日現役満期。十一月一日召集予備後下士官

昭和十六年十一月二十五日

方三次魯南剿共作戦終る方三大隊園谷少佐の作戦功績認めらるる

同年十二月三十日

城武に帰隊。中隊本部付と情報係下士官勤務となる。

外山中隊長の命に依り功績を勤務とより麻生軍曹の身と功績係下士官
として中隊事務に勤務する。

その向業務打合せの爲澆州師団司令部に出張十三中隊所屬の級友
岡田高次郎伍長に隔り。尚戦友の遺骨運送を済寧に送る

兵長と同行兵担室に霜泊降雨の爲城武服隊がおこなったことありた。

昭和十七年五月二日

浙贛作戦参加の爲城武早出発。この作戦に於て大隊長命令傳達と
中隊指揮命令受領係下士官とを大隊長命令傳達と
中隊戦闘詳報・中隊功績序列の表記録の任につく。

同年五月十五日

中支杭州南星到着。より作戦行動開始。雨期の中支那
戦線は揚子江支流を遡り山峽の要路が続く。板橋附近の
敵戦に於ては中隊より四名の犠牲者と軍馬一頭を失つたり。
手榴弾攻車も以て之を奪還し。玉山より常山を占領する。
行動四月杭州出發の時早苗のそよぶ稲も帰路につく頃は
黄を色の田舎に逢つていた。転戦につぐ転戦を將兵の軍服は
汗と泥にまみれぼろ／＼に落ちていた。

同年九月七日

杭州西湖畔に某結新り、軍衣袴支給される。二日同宿營
この想ひおはさるるをい。西湖の月は今も素晴しい。

同年九月十日

一装束の軍服に着替へ杭州より引揚げて鉄道輸送で出發

同年九月十五日

城武苗守隊に帰隊する。戦死者の慰霊祭を行なり。

同年九月二十日

營地交替の爲に三機団中隊は金獅某城移駐する。

同年九月二十七日

右濕性胸膜炎兼脚氣兼コレラや発病の爲に三機団中隊は
病院(濟寧)に入院する。

同年十月四日

連日四十度熱発の爲内地還送要員として青島陸軍病院に
転送される。

昭和十七年十二月一日

任陸軍軍曹

青島陸軍病院入院中に付き城武より傳達を

昭和十七年十二月二十二日

三月間の入院生活は私の性に合ふがた、又ラリや療法も終つたを
軍医殿に原隊復帰を申あて、治療退院と決まつた。

同年十二月二十六日

中隊本部金部果城に復帰する。その時軍曹進級を知る。
中隊本部功績室勤務として林勇兵長と共に事務整理をする。

昭和十八年三月十日

金部果内敵ゲリラ討伐の爲指揮班長として茂木中隊長
出口小隊長と共に行動する。討戦出来ず引揚げる。

同年五月六日

急性単純性蟲様突起炎に因り方三三師団方三野戦病院に入院
病院は清寧にあり。私の入院前初年兵教育下の渡辺上等兵が
腹膜炎で死を遂げられた。手術ありと衛生兵に肩かまされ
運命のほろろをも涙みぐく知つた。

同年五月二十七日

治療退院 金部中隊本部復帰する

同年八月六日

第三三師団の編成改正に因り方三歩兵砲小隊に編入 方三大隊
本部付とすを爲 単果に移駐する
小隊功績係下管と勤務する

同年九月九日

陸支機密方三百五十四号(昭和十五年)に依り近衛歩兵六方五聯隊
補充隊に帰還を命ぜらる。要するに現役兵は四年間を除隊
させる規定あり。我々四年兵は罹り上るを覚んだ。清寧出発。

昭和十八年九月二十一日

清室より鉄道輸送に依り塘沽駐着。四年前西東に別れをい
す神戶港から船に乗せられたこと上陸したとき生きた内地へ帰
還出来ぬかどうか考えたり心なかりかつた。車中同年兵連日等を
感無量で語り合つた。塘沽出発。

同年九月二十二日

山海關通過。東部より四部隊に轉属

同年九月二十三日

鮮満國境(安東)通過

同年九月二十四日

釜山港出発。釜山検査所を身に着せし衣服一着消毒する

同年九月二十五日

下関港上陸。出迎への国防婦人会のフロンが眩しかった。四年振り
の故國の土。このときほど日本女性も美しく感得を感ぜぬはない。

同年九月二十六日

千葉果習志野行舎着

同年十月二日

召集解除。帰還兵を出迎へて戦時体制下で内輪者だけを
八幡宮に参拜するの開放する

昭和十八年八月十八日

定例敍勲にも敍勲七等授瑞宝章

召集令状、小笠原兵团(父島)に往く

昭和十九年六月十六日

臨時召集に依り、東部第六部隊(東京)に應召、長田隊に編入

同年六月二十二日

備第一七五〇三部隊に転属(小笠原兵团)

同年六月三十日

芝浦港お茶、給二等給、才三旅団司令部副官部書記に編入

同年七月九日

敵機来襲に備へ三宅島、鳥島に空砲しつゝ、父島三見港に上陸

同年十二月八日

米艦隊、硫黄島を砲撃す。連日空襲の爲防犯壕作業を行はり

昭和二十年二月十九日

米軍硫黄島に上陸、栗原忠道中將、才百九師団の将兵を指揮し

米海兵三師団の反響を頑強に抵抗す。世電通信報告あり。

昭和二十年三月十七日

約一月の上陸作戦に因り、敵は火焰放射器やロケット砲により坑道陣地を

次々に攻奪、遂に全島総攻奪の世電を、最後に師団長以下玉碎す。

同年四月一日

才百九師団再編成完結、師団長立花芳夫中將、昇格す(父島)

同年 ~~二月一日~~ 二月一日

給一等給 任陸軍曹長

同年八月十五日

終戦詔勅発令、司令部令教を發表、将兵感激に暴音あり。

同年二月四日

父島三見港出発 父島三見港上陸

同年二月七日

父島三見港上陸 復員

同年二月十日